

「なみふる（ナイフル）」は「地震」の古語です。「なみ」は「大地」、「ふる」は「震動する」の意味です。

02.....  
09年度地震学会論文賞2篇 いずれも「ゆっくり地震」研究

「内陸部への影響明らかに」  
「十勝沖でも発見」

04.....  
室戸岬で第11回

地震火山子どもサマースクール

06.....  
天災不忘の旅 ～震災の跡を巡る～

その4 東京都慰霊堂とその周辺

08.....  
一般公開セミナー

広島周辺の被害地震  
—これまでとこれから

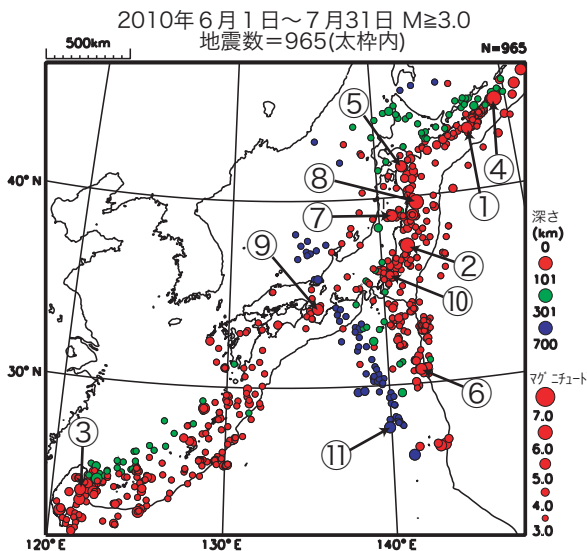


地震火山子どもサマースクール、子どもフォーラムの発表を前に全員で記念撮影。詳しくは4-5ページの記事をご覧ください。



## 2010年6月～7月 おもな地震活動

2010年6月～7月に震度4以上を観測した地震は6回でした。図の範囲の中でマグニチュード(M)3.0以上の地震は965回発生し、このうちM5.0以上の地震は25回でした。「M5.5以上」、「震度5弱以上」、「M5.0以上かつ震度4以上」、「被害を伴ったもの」のいずれかに該当する地震の概要は次のとおりです。



※「おもな地震活動」の見方の詳細は「なみふる」No.31 p.7をご覧ください。

① **北海道東方沖**  
6/5 14:22 深さ62km M5.5 震度3  
北海道で最大震度3を観測しました。

② **福島県沖**  
6/13 12:32 深さ40km M6.2 震度5弱  
太平洋プレートと陸のプレートの境界付近で発生した地震で、福島県で最大震度5弱を観測し、土砂崩落1箇所の被害が発生しました。

③ **台湾付近** 6/15 09:31 M5.5  
震度1以上を観測した地点はありませんでした。

④ **択捉島南東沖**  
6/18 11:23 M6.5 震度3  
北海道で最大震度3を観測しました。

⑤ **苫小牧沖**  
6/28 06:03 M5.1 震度4  
北海道と青森県で最大震度4を観測しました。

⑥ **鳥島近海** 6/28 21:07 M5.7  
震度1以上を観測した地点はありませんでした。

⑦ **岩手県内陸南部**  
7/4 04:33 深さ7km M5.2 震度4  
地殻内で発生した地震で、岩手県で最大震度4を観測し、負傷者1人の被害が発生しました。

⑧ **岩手県沖**  
7/5 06:55 M6.4 深さ34km 震度4  
太平洋プレートと陸のプレートの境界で発生した地震で、岩手県と宮城県で最大震度4を観測しました。

⑨ **奈良県**  
7/21 06:19 深さ58km M5.1 震度4  
フィリピン海プレート内で発生した地震で、奈良県で最大震度4を観測しました。

⑩ **千葉県北東部**  
7/23 06:06 深さ35km M4.9 震度5弱  
フィリピン海プレートと陸のプレートの境界で発生した地震で、茨城県で最大震度5弱を観測しました。

⑪ **小笠原諸島西方沖**  
7/31 05:43 M5.7 深さ498km 震度1  
沈み込んだ太平洋プレート内で発生した地震で、東京都小笠原村の母島で最大震度1を観測しました。

### 世界の地震

M7.0以上あるいは死者50人以上の被害を伴った地震は以下のとおりです。(時刻は日本時間、震源要素は米国地質調査所(USGS)によるもの、Mwは気象庁CMT解によるモーメントマグニチュード(8月10日現在))。

● **インド、ニコバル諸島**  
6/13 04:26 深さ35km Mw7.4  
インド・オーストラリアプレートの内部で発生したと考えられる地震です。

● **インドネシア、パプア**  
6/16 12:16 深さ18km Mw7.0  
現地では死者17人以上、建物被害2,556棟などの被害が発生しました。

● **パプアニューギニア、ニューブリテン**  
7/18 22:04 深さ49km Mw7.0  
7/18 22:34 深さ35km Mw7.3  
太平洋プレートとインド・オーストラリアプレートの境界付近で発生した地震です。

● **フィリピン諸島、ミンダナオ**  
7/24 07:08 深さ612km Mw7.3  
7/24 07:51 深さ584km Mw7.6  
7/24 08:15 深さ631km Mw7.4  
沈み込んだプレートの内部で発生した地震です。

# 内陸部への影響明らかに

## ゆっくりすべりが引き起こした地震活動の変化

強い揺れをおこさず断層がずるずるとすべる、「ゆっくりすべり」と呼ばれる現象があります。2000年後半から2005年頃まで続いた東海地方のゆっくりすべりがよく知られており、その規模はマグニチュード7を超えるものでした(図左)。断層がずれ動く、その周囲の地震活動に変化が見られることがあります。周辺の力(応力)のかかり具合が変わるため、大きな地震の後にたびたびみられます。地震時の急激な断層運動とは異なりますが、東海地方のゆっくりすべりでもプレート境界面がじわじわと大きくずれていきます。周辺にどのような影響を与えたのか、地震活動と応力の関係などを理解する上で興味深い点です。このような背景の下、本論

文は、ゆっくりすべりに伴って周囲にどのような変化があったのかを調べた研究です。

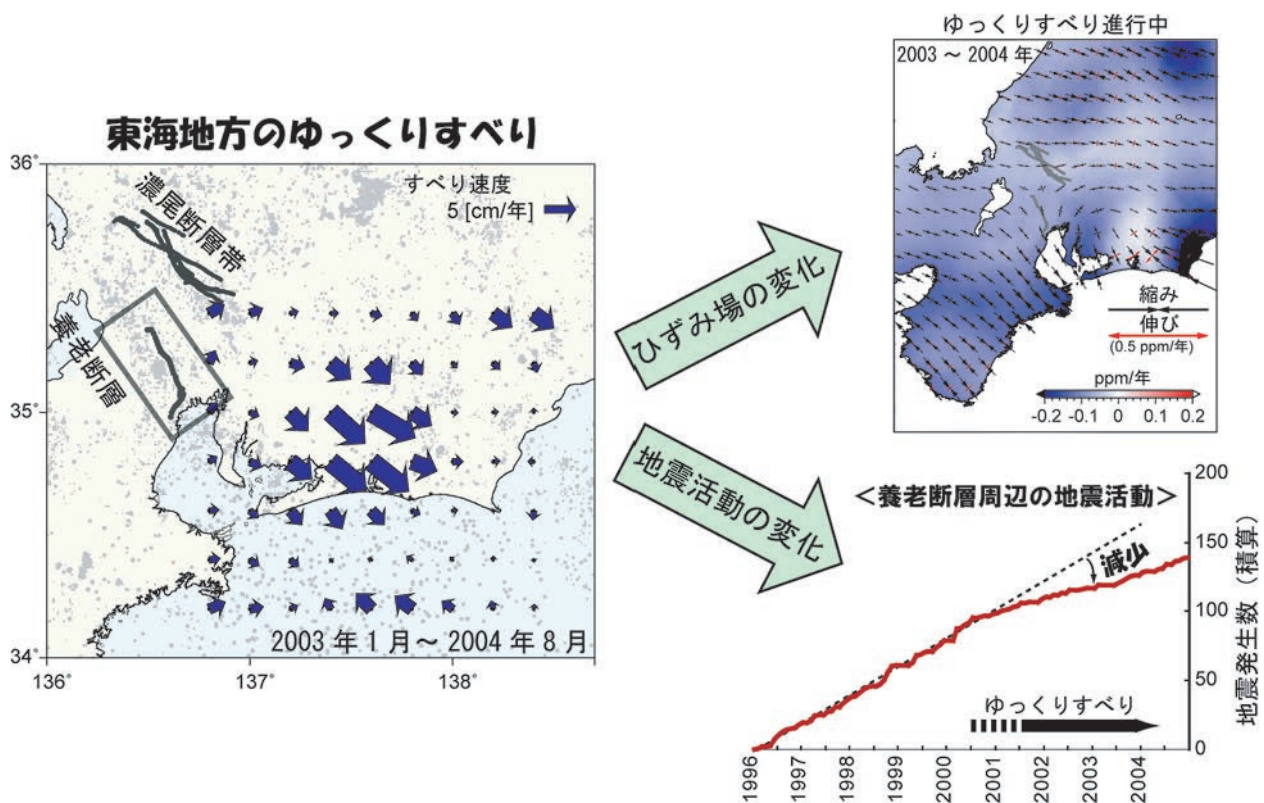
この研究ではまず、広い範囲にわたって地殻の変形パターンが変化していたことを発見しました。通常時、東海地方周辺は北西-南東方向に縮む変形をしています。GPS観測網(GEONET)のデータを用いて地表の伸び縮み(ひずみ)を調べたところ、ゆっくりすべりの発生以降、その縮む方向や大きさが広い範囲で変わっていることがわかりました(図右上)。このことは、地下の応力状態も変化したことを示唆します。そこで、中部地方の微小地震活動を調べたところ、養老断層周辺の地震活動が、ゆっくりすべり進行中に減少していることを発見したのです(図右下)。それでは、ひずみが大きく変化した他の領域でも、やはり地震活動に変化が起きたのでしょうか? 興味深いのは、濃尾断層帯では地震発生率が

ほとんど変化していなかったのです。その理由を探るため、地震の発生の起こり易さ/難さを示す $\Delta CFF$ という指標を調べたところ、東海地方のゆっくりすべりにより、養老断層周辺では地震が発生しにくい応力場に変化していたことがわかりました。すべり域から100km以上離れた島弧内陸に至る地域でも、プレート境界面上のゆっくりすべりが引き起こした応力変化に、地震活動が敏感に反応していたのです。

国土地理院 小林知勝

### 受賞対象論文

Change of strain rate and seismicity in the Chubu district, central Japan, associated with a Tokai slow event, Tomokazu Kobayashi and Manabu Hashimoto Earth Planets Space, 59, 351-361, 2007



東海地方のゆっくりすべり(左)。ゆっくりすべりに伴って、ひずみの変化(右上)と地震活動の変化(右下)が発見されました。1ppmとは、1km離れた2点間の距離が1mm変化する量に相当します。

## 十勝沖でも発見

### 超低周波地震の自動検出

ゆっくり地震(なみふる64号参照)の中で、周期10秒程度のゆれが卓越するものは超低周波地震とよばれています。このような地震が南海トラフ近傍のプレート境界で発生していることが2004年頃には知られていました。しかし、当時は複数観測点のデータを目で見て検出していたため、時間的にも空間的にも一様な基準で探すことは困難で、解析にも時間を要していました。そこで私たちは、ほぼ一様な基準で超低周波地震を自動的に検出するシステムを開発しました。

### 十勝沖における超低周波地震活動の発見

私たちは現在のデータを解析する一方で、

これまでに蓄積されたデータの解析も行い、これまで見落とされていたイベントの探索に取り組みました。その結果、南海トラフのみならず十勝沖においても超低周波地震活動が繰り返し発生してきたことがわかりました。しかも、その活動が2003年十勝沖地震(なみふる41号参照)の発生直後に活発化し、時間が経過するとともに次第に収束していく様子も捉えられました。

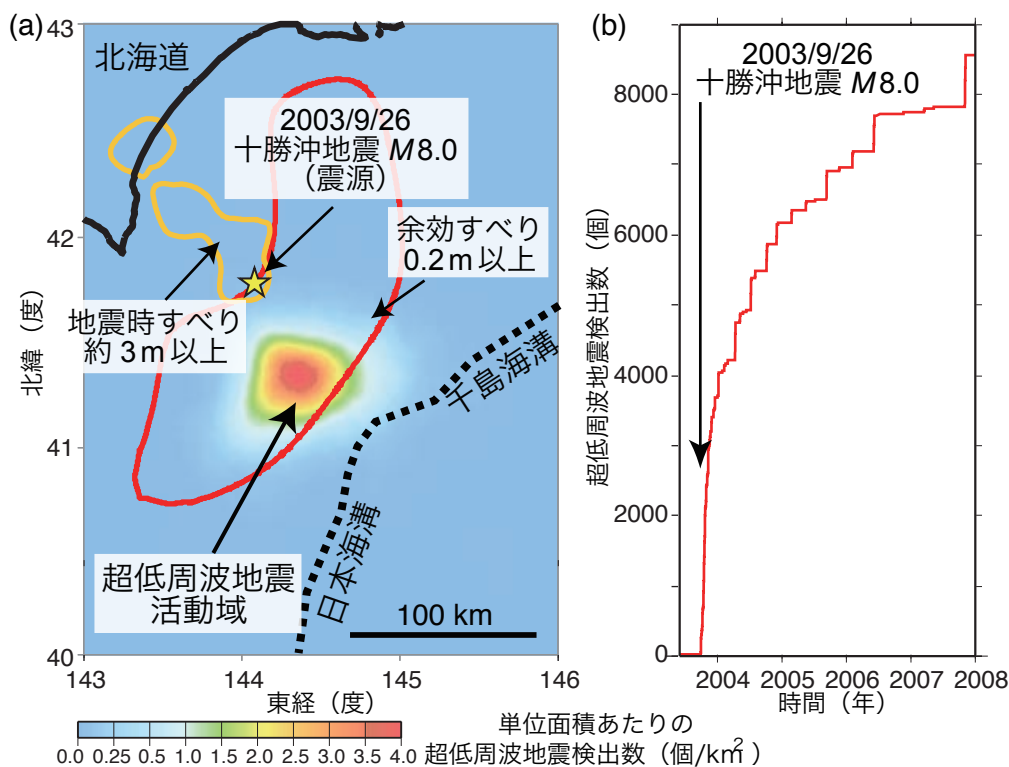
この十勝沖の活動域は、震央位置でみると2003年の本震時に大きくすべった領域(地震時すべり域)よりも海溝側にあり、むしろ地震後にゆっくりとすべった領域(余効すべり域)に位置しています。このことから、余効すべり域の一部で間欠的なすべりが生じ、その近傍で超低周波地震が発生するというモデルが考えられます。現時点では超低周波地震がプレート境界で発生しているのかどうかは

明らかではありませんが、その活動はプレート境界のすべりに敏感であり、プレート境界のモニタリングに有用であることがわかりました。

防災科学技術研究所 浅野 陽一

#### 受賞対象論文

Spatiotemporal distribution of very-low frequency earthquakes in Tokachi-oki near the junction of the Kuril and Japan trenches revealed by using array signal processing, Youichi Asano, Kazushige Obara, and Yoshihiro Ito, Earth Planets Space, 60, 871-875, 2008.



(a) 超低周波地震の検出数密度の空間分布。暖色系の色が示す活動域は地震時すべり域(Yagi, 2004)よりも海溝側にあり、余効すべり域(Miyazaki et al., 2004)内に位置します。

(b) 検出数の時間変化。地震発生直後の極めて活発な活動から、間欠的な活動を繰り返しながら次第に収束していく様子が見られます。

## 次の地震が 新たなジオパークを作る?!

日本地震学会と日本火山学会を中心に、毎年夏に行われている「地震火山こどもサマースクール」。11回目の今年は日本ジオパークのひとつ「室戸ジオパーク」を舞台に、8月7、8の両日、高知県室戸市で開催されました。小学生から高校生まで29名が参加し、高知大学教授の岡村眞実行委員長のもとで室戸ジオパークの「ナゾ」に迫りました。



「硬い岩がどうしてこんなにぐにゃぐにゃになるの?」

室戸市保健福祉センター「やすらぎ」に集合した参加者たち。最初こそ緊張もうかがえましたが、アイスブレイカーとしての自己紹介ゲームや、講師の方々から出題される〇×ゲームなどを通して、チームとしてまとまり始めます。こどもたちは打ちとけるのが早いですね。

やってきた室戸岬の展望台で、まず「南海地震は、この風景のどこで起きる?」という課題にチームごとに取り組みました。見渡す限り震源域と書き込むのが正解です。ただ、日本地震学会前会長の島崎邦彦先生が「どこでも地震は起きるんだよ」と解説し、それにも驚いていたようです。回答を書き込むパノラマ写真のシートに、「南海地震はどこで起きる?」と書くべきところを、「地震はどこで起きる?」と省略してしまったことがきっかけでした。

「ここから見える風景で不思議なところはどこ?」が次の課題です。地元で慣れ親しんだ風景から「不思議」を探するのは難しいもの。頭を悩ます子供たちでしたが、徐々に「あれかな?」との声があがりました。サマースク

ール名物である良い質問や答えに出される「カード」をもらおうと、子どもたちのごきげん度がアップしてきます。

### 付加体の再現実験で、 海の底を体感

お昼のあとは「深海ゾーン」とした行当海岸での観察をしました。堆積や液状化現象が観察できるペットボトルの実験装置「エキジョッカー」で、海底での地層のどきかたや砂の層の移動を手元で再現してから、海岸に降りていきます。ここでは、海岸にある「変なもの」をみんなで見つけます。海底の波の跡や、地震による液状化の跡、海底を這いつついた生き物の跡などを、スケッチや写真に撮ったり、専門家に質問をしたりしていました。途中激しい雨にも見舞われましたが、こどもたちのパワーにまけたのか(?)すぐに止み、無事全ポイントを観察することができました。

付加体の堆積の状況をばっちり記録した後、国立室戸青少年自然の家へ。2日間の



四国にぶつかってシマシマの地層が盛り上がり、地層が切れているのも分かるよ

課題「陸と海が出合っている場所はどうなっているのか」について岡村先生の講義がありました。室戸ジオパークのキャッチコピーが「海と陸が出会う場所」なのです。

兵庫県立神戸高校から参加した3人が、小麦粉とココアで付加体をつくる実験をみんなに説明し、全員で取り組みました。室戸岬がどうやってできてきたのか、この実験で実感できたのではないのでしょうか。この日のために作られた南海地震での室戸岬周辺の津波シミュレーション映像を見た後、波の実験装置を観察しました。

夕ご飯にお風呂の時間を挟み、まだまだサマースクール1日目は終わりません。恒例になりつつある「夜のお話」は、研究者である



手分けして取材した結果を、ジオの恵みのスイカを食べながら、チームで共有しました。

波打ち際の岩のいたずらでできた  
ポットホールに入って、硬い岩が削られて  
丸くなる不思議を実感しました。  
波打ち際から離れたところに残っているのも、  
この地が隆起した証拠なのです。



先生方と近い距離で話せるのも魅力の一つ。  
専門家から聞いた内容を班ごとに報告し、ジ  
オの恵みであるスイカを食べたら就寝  
し、明日に備えました。

## 見慣れた風景に 変化の過程を発見

サマースクール2日目は、元住職の方から  
空海伝説を伺った後、伝説の現場である海  
食洞「御厨人窟」の観察から開始。なぜこの  
場所に洞窟が出来たのか、2つある洞窟のど  
ちらで修行したかを考えました。伝説と違う  
新説・珍説も出たようです。

この洞窟も含めて、最後のフィールドワ  
ークは「隆起ゾーン」です。室戸岬の先端につな  
がる「乱礁遊歩道」には、数千年前に波打ち  
際であったところが、繰り返す地震で隆起し  
た証拠があちこちにあり、ジオパーク室戸の  
魅力炸裂の場所です。ポットホールの中に入  
り、こどもたちのテンションも急上昇しまし  
たが、それでもちゃんと観察はしているところ  
はさすがでした。

最後に、こどもフォーラムでみんなが発表  
するやすらぎホールへ戻ります。2日間の集  
大成のこどもフォーラム発表では、どのグ  
ループもそれぞれに、自分たちの感じたこと、  
考えたことを発表。「次の地震が新しいジオ  
パークをつくる」という言葉など、ステージ上  
にコメンテーターとして並んだ小松幹待室  
戸市長や岡村先生も唸らせる言葉が続いま  
した。

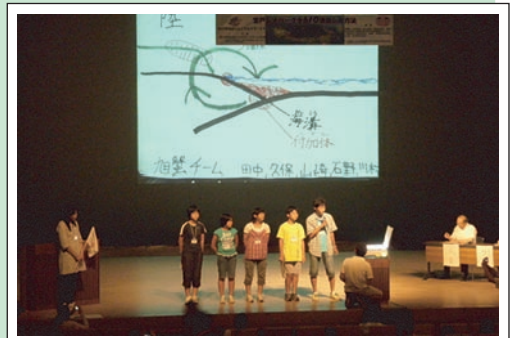
参加者のこどもたちは、サマースクールを  
通じて、一つの風景としか見ていなかったも  
のが、実は昔から徐々に変化してきていて、そ  
こに人々の生活が溶け込んでいることにも気  
付いていました。修了式の場で「室戸ジオ

パークこどもアドバイザー」に認定されたこ  
どもたちは、さっそく世界ジオパークに向けた  
地元の取り組みに参画するようです。

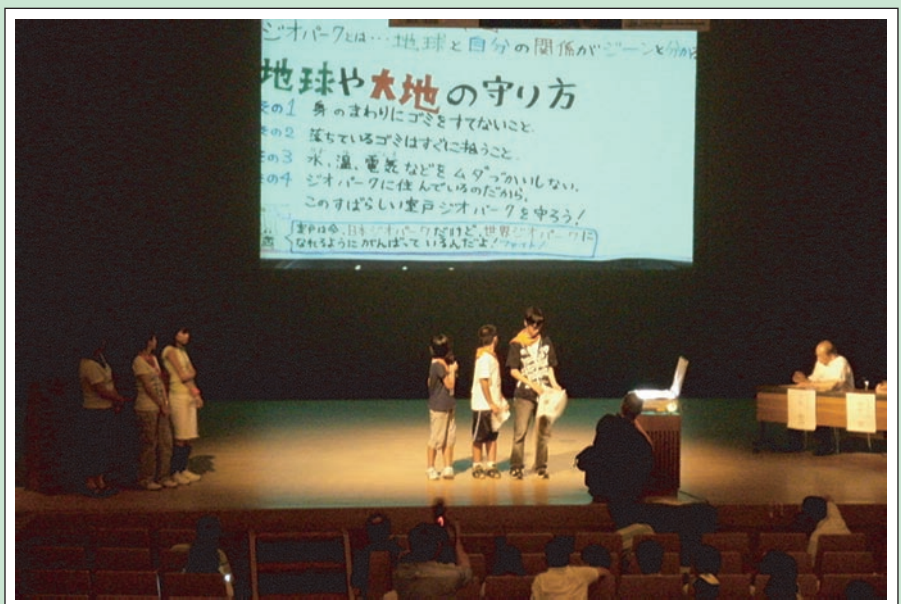
実は私も、サマースクール卒業生。現在は  
法学部の政治学科で学ぶ身です。高校時代  
を通して学んだ防災に、政治に携わる身とし  
て関わっていきたいと考えています。

地球の営みがもたらす大きな恵み。そして  
避けることのできない自然災害。これらにつ  
いて、実際の自然を目の前に、最高の講師の  
方々から教えて頂けるのがサマースクールの  
魅力でしょう。私も、今回の参加者の皆さんと  
いっしょに、日本の未来を創っていけるよう頑  
張りたいと思います。

コーディネーター  
中央大学1年 平田泰之



陸と海が出会うところは、地球のリサイクル工場だったと、  
分かりやすい図を書いて発表してくれました。



ジオパークって「地球と自分の関係がジーンと分かる」ところだって、発表してくれました。

# 天災不亡の旅

わすれじ

その4  
震災の跡を巡る  
東京都慰霊堂とその周辺

江戸時代から火事の際に家財道具を運び出すなという戒めがあったことはその3で述べた通りです。家財道具は財産であるばかりでなく、家族の歴史を刻んできたものとして、どんな時にでも護りたくなるのは人情です。ところがこの戒めを破ることがこれほど恐ろしい結果を招くとは。誰も予想だにできなかった悲劇が現実となった場所、それが陸軍被服廠跡地です。

## 被服廠跡地での出来事

現在、JR総武線両国駅の下り線ホームに立って北側を見ると、江戸東京博物館と両国国技館の大きな建物が見えます。その奥には両国中学校、日大第一中・高校、さらには横網町公園がありますが、大正12(1923)年の関東大震災当時は全てが空地でした。この空地に大正8(1919)年まであった施設が陸軍被服廠です(地図)。

地震は9月1日の正午ころに発生しました。その約2時間後の午後2時頃の写真をみると、2万坪(約6万6千㎡)にもおよぶこの空地は、火災に追われた4万人の人たちとそれぞれが持ち込んだ家財道具で立錐の余地もない状況になっていました。中には遠くへ避難するのが困難な婦女子や老人が多く含まれています。生き残った人の証言によれば、場内ではご飯を食べる人、カルピス飲料水を売る人などもあり、周辺の商店は店を開けていたといえます。全体に悲壮感はあまりなかったようです。

ところが2時間後の午後4時頃になって事態は一変しました。空地の四方八方から一挙に炎が押し寄せ火災旋風となって家財道具に埋もれた人々に襲い掛かったのです。午後5時半ころまでに実に避難者の95%に当る3万8千人が命を落としました。周辺部をあわせると死者は4万4千人になり、関東大震災の死者数の4割以上がこの地で犠牲になったのです。



写真1 東京都慰霊堂内に掛けられた徳永柳州と門人による油絵。被服廠跡の遺骨の山(2010年1月撮影)。

## 震災記念堂の建設

9月といえば残暑の季節です。試行錯誤の末、現地に重油炉を設けて空地は臨時の火葬場となりました。遺体は高さ十尺(約3m)にもおよぶ白骨の山を築いたといえます(写真1)。白骨の山を前に、当初から慰霊のために様々な宗派団体が集まり多くの人々が奉仕や弔問に訪れましたがそれでは収拾が付きません。見るに見かねた水戸の篤志家がまずは遺骨を整理するために大瓶70個を寄贈し、それでも収容できない遺骨は木箱に詰め、震災後一ヶ月を経てバラックの仮納骨堂が建設されることになりました。

さらに翌年になって、当時東京市長であった永田秀次郎が(財)東京震災記念事業協会を設けて納骨堂や記念施設の検討に入り、公園整備と震災記念堂の建設が本格化することになります。あまりの大災害ゆえに建設は紆余曲折し、結局は設計懸賞(コンペ)が行われました。

前田健二郎の案が一席となりますが、モダンすぎるとして仏教界方面からの異議があり没になってしまいます。結局最後は審査員だった伊東忠太の設計で昭和5(1930)年に竣工したのが現在横網町公園にある震災記念堂です(写真2)。建物は三重の塔と講堂よりなり、三重の塔の基部は納骨堂とし、講堂の内陣には祭壇を設け、外陣には記念物や記念絵画などを陳列するように考えられています。外観は仏教寺院のようですが、他宗にも配慮して当初から無宗教施設として設置されました。

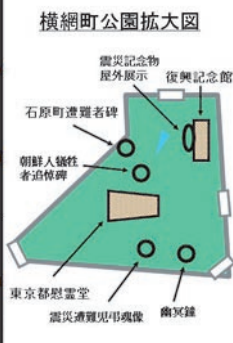


写真2 横網町公園にある東京都慰霊堂の外観(2009年12月撮影)。

横網町公園とその周辺にある関東大震災関連物および施設。



写真3 横綱町公園にある東京都復興記念館の外観。左側には震災記念物の屋外展示がある(2009年12月撮影)。



写真4 本所警察署まえにある、相生警察署員の殉職碑(左)と原庭警察署員の殉職碑(右)(2009年12月撮影)。

## 復興記念館とその他の記念碑

やっとのことで出来た震災記念堂ですが、震災後寄せられた記念物や復興展覧会の出品物などの収納ですぐに手狭となり、翌年には、公園内に「復興記念館」が急遽建てられました(写真3)。設計は伊東忠太と佐野利器です。「震災記念堂」は、その後、昭和2(1951)年に戦争の犠牲者が合祀されて「東京都慰霊堂」となり、「復興記念館」も「東京都復興記念館」となって現在に至っています。

公園内には、この他に「震災遭難児弔魂像」「幽冥鐘」「関東大震災朝鮮人犠牲者追悼碑」「清風句碑」「石原町遭難者碑」などがあります。石原町は公園の東側に隣接する地域で、遭難者碑の裏面の碑文から、この碑が住民によって地震の2年後大正14(1925)年9月に建立され、昭和6(1931)年8月にここに移建されたことがわかります。碑文は当時8千人いた町民のうち7千人が震災で命を落とすと伝えています。また「清風句碑」というのは、復興に尽力した永田秀次郎(俳名清風)を顕彰する碑です。

本所被服廠跡地に含まれる地域には、この他に築地本願寺が建立した慈光院があります。遭難者の遺骨粉を塗入した漆塗金粉を施し、体内にも遺骨を納めたという阿弥陀如来立像が本尊として祀られています。境内には震災直後に築地本願寺が開設した託児所を起源とする江東学園幼稚園もあります。跡地の西側にあるのは震災後復元された「旧安田庭園」です。

## 殉職警官の慰霊碑

本所被服廠跡地を出て総武線の南側にまわると現在の京葉道路沿いに本所警察署があります。その敷地の一画に、被服廠跡を管轄していた本所相生警察署と隣接地域を管轄していた本所原庭警察署の殉職警官の慰霊碑があります(写真4)。裏面の記述から前者は震災十回忌の昭和8(1933)年に、後者は一周忌の大正13(1924)年に建立されたことがわかります。相生署の山内署長は、もともと避難者が携帯する家財を放棄させて両国橋を渡らせ、上野方面または日比谷方面に避難させようとしたが、折からの国技館

の火災などで渡橋させられず、致し方なく被服廠跡地に避難誘導しようとしたと言います。その後も山内署長以下署員は懸命に避難者の擁護に勤めますが、先に述べたように最悪の事態となって署長以下34名の署員も殉職しました。

## 回向院

本所警察署からさらに両国橋に向かって400mほどゆくと回向院があります。旧国技館は東隣にありました。山門脇にある寺の由来記には、関東大震災での死者十万余の分骨が納骨堂に安置されていると書かれています。その訳を回向院の僧侶の方に聞いたところ、「遺骨の多くは万人塚と呼ばれる明暦の大火(1657年)以来の無縁塚に埋葬されている(写真5)。遺族や関係者によって最初から回向院に運び込まれた遺骨もあったが、一度被服廠跡の仮納骨堂に納めたあとで回向院へ分骨したのも多かった。」ということでした。

そのような遺族や関係者の気持ちに応じて、東京市もその都度分骨に応じてきましたが、けじめを付ける意味もあって大正14(1925)年3月に公告を出し期限を決めて分骨に応じる旨を明らかにしました。回向院は記念堂がもつ無宗教施設としての限界を補間する役割を果たしたということができるかもしれません。

回向院の本尊は、名工釜屋六衛門が宝永2(1705)年に作った銅製の阿弥陀仏です。現在は堂内に納められていますが、震災当時は万人塚の上に鎮座していたそうです。阿弥陀仏を頂いた万人塚は、回向院の諸堂が全て灰燼に帰したなかでひとり健在であったといえます。万人塚の上には現在数体の石のお地蔵さまが立っています。よく見ると向かって左奥のお地蔵さまの台座には、「為大正十二年九月一日大震災翌川岸遭難者」の文字が見えます。堅川(たてかわ)は、回向院のすぐ南側を流れる川で、そこでの溺死者の回向のために建てられたお地蔵さまでしょう。万人塚には今でも人々によって、震災や空襲さらにはその他の天変地異などで無くなった人々を供養するために多数の卒塔婆が立てられています。「世界のどこでどのような災害



写真5 現在の万人塚と堅川河岸での犠牲者のためのお地蔵さま(2010年2月撮影)。

が起こっても、我々是我々のやり方でその都度勝手に全ての犠牲者の回向を行っています。」という僧侶の言葉が印象的でした。

回向院には、この他に、関東大震災に関して相生理髪業組合が施主となって建てた九十有余名の慰霊碑があり、明暦の大火(1657年)、安政江戸地震(1855年)、天明浅間山噴火(1783年)などの犠牲者の碑と並んで立っています。

## 将来に向けて

以上のように東京都慰霊堂の周辺には、関東大震災にまつわる多くの慰霊碑や記念物があります。この地域が関東大震災のまさに被害の中心地であったことを物語っています。ところが肝心の東京都慰霊堂や東京都復興記念館は85年あまりの歳月を経て、記憶の風化を感じざるを得ない状況になっています。

慰霊堂は鳩害や建物の老朽化、堂内の展示絵画や写真の傷みが目立ち、復興記念館内の陳列では、戦災その他災害資料が混在し、弁別の必要性を強く感じます。さらに両建物内にある未整理、未陳列の資料についての調査・保全も急務です。地震国日本を代表する慰霊の場として、また防災祈念の場として、周辺地域も合わせ是非とも将来にわたって大切に護り続けて行くべきとの思いを、震災から87年目の今日、あらためて強く感じます。



日本地震学会広報紙「なみふる」第81号  
2010年9月1日発行  
定価150円(郵送料別)

発行者 (社)日本地震学会  
〒113-0033  
東京都文京区本郷6-26-12  
東京RSビル8F  
TEL. 03-5803-9570  
FAX. 03-5803-9577  
(執務日:月~金)  
ホームページ  
<http://www.soc.nii.ac.jp/ssj/>  
E-mail  
zisin-koho@tokyo.email.ne.jp

編集者 広報委員会  
亀 伸樹(委員長)  
伊藤 忍(編集長)  
五十嵐 俊博、川方 裕則、小泉 尚嗣  
武村 雅之、田所 敬一、田中 聡  
西田 究、福満 修一郎、古村 孝志  
八木 勇治、矢部 康男、山崎 太郎

印刷 創文印刷工業(株)

※本紙に掲載された記事等の著作権は日本地震学会に帰属します。

## 一般公開セミナー

# 「これまででとこれから」 「広島周辺の被害地震」

日本地震学会では、2010年度秋季大会開催に合わせて、10月30日(土)に広島YMCAホール(広島市中区八丁堀)にて「広島周辺の被害地震—これまでとこれから」をテーマとした「一般公開セミナー」を開催します。なお、セミナーへの参加は無料ですが、事前申込が必要です。多くの皆さまのご参加をお待ちしています。

参加ご希望の方は、氏名・連絡先(複数名の場合は代表者のみ)を明記の上、下記申込み先までファックスまたは電子メールにてお申し込みください。なお、受付は先着285名で締め切らせていただきます。当日座席に余裕がある場合には、会場での直接申し込みも可能です。

**開催日時：平成22年10月30日(土)13時~16時**

**会場：広島YMCAホール**

路面電車「立町」下車徒歩3分、  
アストラムライン「県庁前」下車徒歩7分

主催：(社)日本地震学会  
申込み・問い合わせ先：担当/須田直樹  
fax:082-424-0735  
e-mail:nsuda@hiroshima-u.ac.jp

### 中国地方とその周辺の活断層と地震

奥村晃史(広島大学教授)

中国地方は日本の中でも比較的地殻変動の穏やかな地域ですが、1943年鳥取地震や2000年鳥取県西部地震のような大きな地震が繰り返し発生しています。活断層の調査は将来どこで大地震が発生するかを予測するための基礎であり、中国地方では最近、従来知られていなかった活断層が、陸上でも海底でも相次いで見いだされ評価されています。また既知の活断層についても詳しい調査が進められています。未来の地震をどのようにして予測し、災害軽減に結びつけるかを、地形や地質の観点から検討してみたいと思います。

### 広島県の地震環境—地震を忘れず、恐れず、侮らず

松浦律子(地震予知総合研究振興会部長)

中国地方は日本の他の地域に比べると地震活動度が低く、被害地震も少ないとこそありますが、半世紀に1回かならず広島県で震度5以上になる地震が芸予地方で発生します。数千年に1回程度とめったに発生しない大きな活断層の地震に関する詳しいことは奥村先生のご講演で勉強していただくとして、私はもうちょっと頻度が高く、人生で1-2回は遭遇するこの芸予地震など広島地震活動を知っていただき、地震を忘れず、恐れず、侮らず、広島で生活していただくヒントを得ていただければと思います。

### 広報紙「なみふる」購読申込のご案内

日本地震学会の広報紙「なみふる」は、隔月発行(年間6号)しております。「なみふる」の購読をご希望の方は、氏名、住所、電話番号を明記の上、年間購読料を郵便振替で下記振替口座にお振り込み下さい。なお、「なみふる」は日本地震学会ホームページでもご覧になれ、pdfファイル版を無料でダウンロードして印刷することもできます。

年間購読料(送料込)  
日本地震学会会員 800円  
非会員 1200円

振替口座  
00120-0-11918 「日本地震学会」  
※通信欄に「広報紙希望」とご記入下さい。